

巻頭言

青山愛香

研究報告集『BRÜCKE』第34号の刊行をおめでとうございます。執筆者の松岡由佳さんと井上翔貴さんが、長い道のりを経て無事発行まで辿り着きました。

ここに収められている松岡さんの論考は19世紀末から20世紀初頭にかけて出版されたウィーン分離派の雑誌『ヴェル・サクルム』（1898-1903年）について。井上さんは、ヨーハン・シュトラウス（息子）（1825-1899年）の男性合唱曲に関するもので、いずれもハプスブルク帝国末期のウィーンで花開いた芸術に関するものです。

ヨーロッパで美術史学と音楽学が学問として盛んになったのは、まさにこの時代のウィーンでした。美術史学という学問は19世紀半ばに初めてドイツ語圏の大学に講座が置かれた比較的新しい学問分野です。ハプスブルク家の歴代美術コレクションを擁するウィーンは早くから優れた研究者を排出し、中でもデューラー研究者として名を馳せたモーリツ・タウジンゲ（1835-1884年）は1879年にウィーン大学美術史講座の正教授となり、その後フランツ・ヴィックホフ（1857-1944年）やアロイス・リーゲル（1858-1905年）等が続いてウィーン学派を確立します。

音楽史の講義の基本となるのは、各時代の楽曲の音源や楽譜だと思いますが、美術史学においては、それは作品の画像資料です。現在は世界中の図書館、美術館および博物館が所蔵作品のデジタル化を進めており、20年前には考えられなかったような貴重な写本の全頁がインターネット上で、カラーで細部まで検証できる時代が到来しました。その恩恵を受けているのが、例えば今回の松岡さんの雑誌『ヴェル・サクルム』研究でしょう。1990年代の学生であれば、こうした作品を研究対象にする際はまずは現地に赴き、許可を取って全てのページを写真撮影するか、作品の一部のカラー写真を注文して、半年程待って入手するしか方法がなかったのですが、現在では『ヴェル・サクルム』のような貴重な雑誌が、全ての号を一度にまとめてインターネット上で検索・閲覧することができるようになりました。美術史においては、こうしたデジタル化が研究・教育において大きな恩恵をもたらしています。

写真というメディアは1830年代にフランスで開発され、それを初めて美術作品の記録のために用いたのはイギリスのプリンス・アルバートでした。しかし、当時最先端の機材が大学の美術史講座で用いられるまでの道のりは遠く、日本が初めてウィーン万博に出品した1873年にウィーン大学において第一回国際美術史学会が開催されて、写真技術と美術史研究について論争が行われています。これは写真というメディアを導入することで、オリジナルの美術作品がない大学の教室において、いかに学生に視覚教材を提供するかという問題の解決を目指すものでした。そしてこの国際会議以降、ウィーンやプロイセンのベルリンにおいて、本格的に美術作品を白黒とカラーで図版化するという技術革新が問題になったのです。ベルリンのフリードリヒ・リップマン（1838-1903年）が、リトグラフと写真を組み

合わせたデューラーの図版をカラーで、さらにはオリジナルのサイズで出版したのが、1883年でした。

それから 100 年以上の時を経てこの世はデジタルの世界となり、我々は日々その恩恵を受けています。しかし、文献検索・収集、画像検索が飛躍的に進んだ世界の中で、美術史学や音楽学は本当に 100 年前以上に発展しているのでしょうか。いくら新しい技術が進歩したとしても、美術や音楽作品には忍耐強く、楽しみながら向き合い、自身の五感を使って分析し、時間をかけて新しい方法論や解釈を模索していかなければなりません。そして、それはまさに AI のようなものではなく、我々ホモ・サピエンスに委ねられた作業であるということ間違いありません。ウィーン学派の碩学オットー・ベヒト（1902-1988 年）は美術作品の研究においては「作品に耳を傾ける（hinhorchen する）」必要があると言いましたが、これはとりわけ今の時代に響く、大切な言葉だと思います。